

エディトリアル

三重県立志摩病院 副管理者

志摩地域医療福祉センター センター長 鈴木孝明

現在の日本の医療は西洋医学が主流ではあるものの、漢方薬は健康保険上薬価収載されており、保険を使って処方できることも事実である。これは欧米と大きく異なる。また日経メディカルが2012年に行った調査によると、回答のあった診療所の91.8%、病院であっても81.1%で漢方薬が処方されており、日本の医療において一定の役割を担っていると言える。住民の視点では、何らかの不調を自覚した時の対処法として、漢方薬による治療に限らず、それぞれの地域にある整体、マッサージ、アロマセラピー、鍼灸、整膚、アーユルヴェーダなど保険診療内外の多様なサービスを受けることができ、日常的に治療を継続して受けている方も少なくない。何らかの体調異常を自覚した際に、医療機関を受診せず代替医療で対応する住民は5%程度であるという調査もある¹⁾。日本の医療の歴史をたどると、明治時代初期以前はいわゆる西洋医学ではなく東洋医学が主流であったことより、日本においては代替医療という言葉はふさわしくないかもしれない。医療者が考えるよりも住民にとっては身近な存在の漢方薬であり、日常診療で患者から漢方薬の処方を希望される機会もしばしばあるだろうが、処方している多くの医師は漢方薬を用いた診療について医科大学で学んでいないし、漢方医学の研修会に参加している者もそう多くはないと推測される。2001年(平成13年)より卒前教育でも東洋医学が医学教育モデル・コア・カリキュラムのガイドライン²⁾に取り入れられており、平成22年度の改訂では「和漢薬(漢方薬)の特徴や使用の現状について概説できる」と以前の内容より現状に踏み込んだ内容になっている。ところが、実際の授業時間数を医学科の臨床実習学生に尋ねても「講義が数コマ…だったかな?」との返事ばかりであり、実践的な内容ではないとも懸念される。冒頭にも述べたが、実際に多くの医療機関で処方されているにもかかわらず、処方する医師自身が漢方薬の使い方についてよく学んでいないのは問題である。

近年、日本東洋医学会の中でも西洋医学的な研究手法で漢方薬のエビデンスを蓄積していこうという動きがある。西洋医学の土俵で勝負して従来の西洋薬に比較しても良い結果を残しているものもあるようだし、エビデンスの蓄積自体に反対するものではない。しかし、その結果より多くの医師が西洋医学的に、しかも漫然と処方を継続してしまうのではないかと私を心配している。実際に慢性肝炎の患者に小柴胡湯を長期投与していたところ間質性肺炎の副作用で患者が死亡したケースが1990年代に報道されたことがある。「漢方薬は長く飲まないと効かない」とか「副作用がほとんどない」という認識は誤解であると強調したい。長く飲まないと効果が現れない処方も一部にあるようだが、多くは不適切な処方を漫然と継続しているから効果が出ないのではないかと、特に初学者は思った方がよい。適切な処方であれば比較的早期に効果が現れるものである。西洋医学では病気の原因を究明し、原因を取り除くことが根本にあり、再現性、客観性を重視するのに対し、日本における漢方診療では生体の正常からの偏位やねじれを元に戻そうとするバランスを取る治し方、自然治癒力を増強していくことを特徴としており³⁾、同じ

評価法で比較すること自体無理があると考える。

しかし、漢方薬を保険診療で処方できるという日本の現状は、病気の見方が全く異なる東洋と西洋の医学の両者を活用して患者の治療にあたることができることでもあり、世界に類を見ない守備範囲を持っているとも言える。特に心と身体の異常が絡み合っている場合、病変が多部位にわたり愁訴の多いもの、あるいは原因が解明されていない疾患や明らかな病態の見いだせないものに対して漢方薬による治療が有効なことがある。気概念や「証」と言われる独特の診断名、内臓観や経絡(気が流れる道)など、漢方の概念も学んでいくことは必要だが、かなり独特であることに加え、量も膨大であり、実践しながら学んでいくにしても深い理解への進展の妨げになっている。

今回の特集では、比較的身近な存在でありながらあまり知られていない「漢方」について、紹介していく。潜在している可能性を探っていくと同時に、不適切な使用を続けることで患者に害を及ぼすかもしれないということを認識しながら、漢方薬を用いた診療を少しずつ続けていただきたい。いわゆる漢方が現代中国の中医学とは異なる点を含めた歴史的経緯、西洋医学的評価を経て得たエビデンスの教育現場での活用、独特の診断法や代表的な処方、そして地域医療での実践について、専門、非専門の各先生方に執筆をお願いした。この特集を読むことで十分な理解を得ることはできないかもしれないが、相談できる相手を見つけ、今後の漢方診療を安全かつ効果的に実践していただくことを願う。

文献

- 1) Fukui, T. et al : 日本における一般住民の健康問題の発生頻度とその対処行動. JMAJ 2005 ; 48 : 163-167.
- 2) 医学教育モデルコアカリキュラム(平成22年度改訂版). 文部科学省ホームページ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/033-1/toushin/1304433.htm
- 3) 寺澤捷年 : JJNブックス 絵で見る和漢診療学. 医学書院, 1996.